

領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討（2）

～領域及び保育内容の指導法に関する科目（環境）の授業実践から～

Examination of the Contents of the Class that Connects the Specialized Knowledge of the Area and the Childcare Plan: Class Practice for Subjects Related to the Teaching Method of the Area and Childcare Content (Environment)

小 林 美 沙 子
(短期大学部保育学科)

キーワード：保育者養成、領域「環境」、ICT 機器の活用、直接体験

1. はじめに

本稿は、「領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討」(小林, 2019)の継続研究である。小林(2019)は、領域及び保育内容の指導法に関する科目「幼児と人間関係」「保育内容・人間関係の指導法」(短期大学部1年生対象)において、領域の教育内容に関する専門知識と実践力の一つである保育構想(保育案の作成と教材研究)とのつながりを生む授業内容について、授業配列、授業形式、学習内容の提示の仕方、ICTの活用の4つの面から授業実践を工夫し、検討した。その結果、学生は学習内容の提示の仕方や授業形式を工夫することで、これまでの学外実習等で得た知識や経験を授業での学習内容に結びつけながら、保育構想へとつなげていくのではないかと考えられた。しかし、ICTの活用については、器機の操作への不慣れから苦手意識をもつ学生もおり、学生がICT器機に親しみながら保育実践での活用をイメージして学ぶことが出来る教材の工夫と取り入れ方が今後の課題として挙げた。

ICT器機の活用は、2019(平成31)年4月よりスタートした教職課程に新たに加わった内容の一つである。幼稚園教諭養成の場合、「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」や「教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む。)」を学ぶ授業において主に取り扱われている¹⁾。これらの授業を通して学生は、情報機器を活用した効果的な実践を構想したり、教材の作成・活用の基礎を身に付けたりすることとなる。そのため、「学生が具体的な保育場面をイメージしながら学べるよう、大学教員は講義においても映像資料やICT等を効果的に活用するとともに、学生自身がICTを活用したり、ICTを活用した幼児の活動の展開を考えたりする機会をもつように」(吉永, 2017)し、授業を工夫する必要がある。

そこで本稿では、領域の専門知識と実践力を一体的に学ぶことができる授業内容について、ICT 器機の活用に焦点を当て検討する。具体的には、2020 年度に筆者が短期大学部の授業として取り組んだ「幼児と環境」「保育内容・環境の指導法」の授業実践を取り上げ、学生が保育実践への活用をイメージしながら ICT 器機を活用して学べる教材について検討する。なお、この授業は、小林（2019）で対象となった学生が 2 年次に受講した科目である。

2. 「領域及び保育内容の指導法に関する科目」（環境）の授業内容に求められるもの

保育内容の 5 領域の一つである領域「環境」は、身近な環境との関わりに関する領域であり、子どもが「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」（幼稚園教育要領解説 p.193）ことを目指している。領域のねらいには、「身近な環境」「身近な事象」という言葉が出現し、子どもにとっての身近な環境、身近に起こる不思議や感動など、幼児にとっての身近な環境や心動かされる事象への理解が授業のポイントとなる。そのため、子どもを取り巻く環境への理解と共に、子どもがどのように環境へ関わり学びを深めていくのかを講義や演習により学生が考え、気付くことが、授業を行う上で大切であると考えられる。

3. 方法

【対象】

短期大学部保育学科、春学期開講科目「幼児と環境」「保育内容・環境の指導法」（必修科目）の受講生：2 年生（2019 年入学）42 名を対象とした。

【実施期間】

2020 年度春学期（2020 年 4 月～2020 年 9 月）

【分析の方法】

授業の中で行った活動のうち学生が自ら活動を行う演習活動を抽出し、活動内での ICT 器機の活用について整理した。また、学生が授業内で作成した課題や感想における記述を KJ 法²⁾の手法を用いて分析した。

【倫理的配慮】

調査の実施に当たり、学生へ書面及び口頭による説明を行い、同意を得た上で行った。また、学生の感想や記述内容については、個人が特定されない形で抜粋し、掲載している。

4. 結果

1) 授業の実施方法と授業内容の概要

(1)授業の実施方法

「幼児と環境」（全 8 回）、「保育内容・環境の指導法」（全 8 回）の授業は、遠隔及び対面により実施した（表 1）。遠隔授業については、Microsoft が提供する Teams を利用し、リアルタイム配信により行った。また、演習や課題は、Web 検索の利用、写真を挿入したレポートの作成、パワーポイントによる発表資料の作成など、ICT 器機の活用が必須であるものを取り入れた。

(2)授業内容の概要

実施する授業では、教職課程コアカリキュラムに基づき、シラバスを作成した。全 16 回の授業のうち、前半に領域の専門的事項を学ぶ「幼児と環境」を、後半に保育内容の指導法を学ぶ「保育内容・環境の指導法」の授業を行った。授業内容は、授業全体を通して、学生が保育場面を具体的に想像し保育構想（指導案作成、模擬保育）へとつながるようにすること、他者と活動を共有しながら他者の視点を取り込み自分の考えを深められるようにすること、を意識し構成した。具体的には、以下の 2 点について工夫した。

- ①**演習活動を重視**：領域「環境」の学びの特性を踏まえ、体験を通して気付く・考える機会を多く取り入れた（授業内容に関する演習活動を毎授業ごとに行う）。また、演習内容は、直接体験することを重視し、「子どもがどのように環境との関わりを深めていくのか」を学生自身が体験から学べるよう活動を精選した。
- ②**振り返りの重視**：一人ひとりの学生が体験から気付く・考えることを大切に、授業ごとに学生が授業内容を振り返る時間を設けた。また、他者の考えや気付きを共有する機会として、グループ活動や ICT 器機を活用して記録をとること（例えば写真撮影）を取り入れた。

表 1：「幼児と環境」「保育内容・環境の指導法」の授業概要

科目名	回数	授業内容	形式	演習（体験、課題）の内容
領域に関する専門的事項	1	保育における「環境」について：子どもにとって身近な環境とは	遠隔	育ててみたい夏野菜のアンケート
	2	乳幼児の自然との関わり①：身近な自然との関わり	遠隔	季節の生き物調べ
	3	乳幼児の自然との関わり②：持続可能な社会とは	遠隔	「生物多様性」の意味を調べる 自然物を使った遊び（カラスノエンドウ）
	4	保育における物的環境①：乳幼児の育ちを促す環境とは	遠隔	自分が夢中で遊んだ遊びの環境を考える
	5	保育における物的環境②：保育環境をデザインする	遠隔	環境構成の意義と私の保育観について考える
	6	子どもを守る安全な環境	遠隔	育てたい夏野菜を決める
	7	生活に必要な数量、図形などへの関心と発達	遠隔	身の回りにある形を探す
	8	乳幼児期の自然との関わり③：土づくり	対面	土に触れる・鍬などの道具を使う
保育内容・環境の指導法	9	乳幼児期の自然との関わり④：野菜の植え付け	対面	野菜苗を植える
	10	乳幼児期の自然との関わり⑤：野菜の観察と環境構成	対面	野菜の観察と手入れ 看板づくり
	11	数量・図形等に関わる保育の実践－フィールドビンゴ	対面	野菜の観察と手入れ 学内フィールドビンゴ
	12	保育における社会環境	遠隔	模擬保育の話し合い
	13	身近な素材や自然環境を用いた保育の実践①：計画の立案	対面	野菜の観察と手入れ（収穫を含む）
	14	身近な素材や自然環境を用いた保育の実践②：教材研究	対面	発表資料の作成（保育案の作成含む） 教材研究・模擬保育
	15	身近な素材や自然環境を用いた保育の実践③：模擬保育	対面	模擬保育の発表と振り返り
	16	身近な素材や自然環境を用いた保育の実践④：保育の評価・改善	対面	

2) 授業で取り入れた演習内容と学生の学び

(1) 演習活動における ICT 器機の活用状況

授業で取り上げた 19 種類の演習活動（表 1）のうち Teams の基本操作（グループでの Web 会議を除く）及び Word による文書作成を除いた演習活動 17 種類における ICT 器機の活用および直接体験の有無について示した（表 2）。また、表 2 のうち「ICT+直接」に分類された 7 種類の演習における ICT 器機を活用した活動の具体についても示した（表 3）。

表 2 より、ICT 器機と直接体験を組み合わせた活動が最も多く行われたことが分かる。また、表 3 より ICT 器機の活用として、Web 検索、写真撮影、パワーポイントの 3 つを直接体験と組み合わせて行っていたことが分かる。

表 2：ICT 器機の活用及び直接体験の有無

	ICTのみ	ICT+直接	直接のみ	計
遠隔	5	2	0	7
対面	1	5	4	10
	計			17

表 3：ICT 器機を活用した活動の具体

	Web検索	写真撮影	Web会議	PPT	計
遠隔	1	1	0	0	2
対面	0	4	0	1	5
	計				7

(2) 演習活動の実際

表 2 のうち、最も多く授業において行われた ICT 器機の活用と直接体験の両方を組み合わせた演習活動について、実践事例を示す。事例は、Web 検索と組み合わせた「自然物を使った遊び」（第 3 回授業）、写真撮影と組み合わせた「身の回りにある形さがし」（第 7 回授業）と「夏野菜の栽培活動」（全期間において実施）、パワーポイントと組み合わせた「模擬保育」（第 12～16 回授業）の 4 つを取り上げる。

① 自然物を使った遊び（第 3 回授業）__Web 検索+直接体験

第 3 回の授業は、遠隔で行った。この授業では、自然環境についての講義（SDGs や園庭環境など）を行い、授業内課題の一つとして自然物を使った遊び（カラスノエンドウ³⁾で笛作り）を提示した。笛のつくり方については、授業担当者が説明するとともに、YouTube を活用し調べるように伝えた。また、活動後に授業担当者が作成した笛を鳴らす場面を実際にみせた。

授業後の感想から、カラスノエンドウで笛をつくり鳴らせた学生は 24 人（57%）、鳴らせなかった学生は 18 人（43%）であった。また、学生たちは、自分たちの身近な環境（住居近くの公園や道端、自宅の庭など）でカラスノエンドウを探し、笛を作成していた。鳴らすことが出来た学生の多くは、鳴らすことが出来た喜びや子どもも自分と同じように嬉しくなるだろうと感想を書いていた。また、学生の多くは幼少期に遊んだ思い出を懐かしんでいた。

②身の回りにある形さがし(第7回授業)__写真撮影+直接体験

第7回の授業は、遠隔で行った。幼児期の「生活に必要な数量、図形などへの関心と発達」についての講義を行い、課題として身の回りにある形を探す活動を提示した。課題は、NHKのEテレ「ミミクリーズ」⁴⁾を参考に、子どもになって形を探すように促した。課題の作成については、見つけた形を写真に撮り、100字程度の説明文と共にレポートを作成させた(図1)。



図1：学生作品

授業後の感想から、学生は身近な環境に様々な形があることを改めて感じたこと、子どもの気持ちになって楽しく課題を行ったことなどの感想が見られた。

③夏野菜の栽培活動(全期間に実施)__写真撮影+直接体験

夏野菜の栽培活動は、「幼児と環境」「保育内容・環境の指導法」の授業全体を通して行った。学生の活動内容及び授業での工夫については図2の通りである。栽培活動では、学生が夏野菜を栽培する中で幼児が栽培活動を行う様子をイメージできるように環境や活動内容を工夫した(例えば、看板の設置など)。また、最終課題として「夏野菜の生長記録」を作成させた(図3)。栽培活動については、週に1回程度、授業内で作業を行う一方、グループごとに野菜の様子を写真に撮影するように伝えた。



図2：夏野菜の栽培活動に関する授業内容と流れ



図 3：学生が作成した「夏野菜の生長記録」

「野菜の栽培活動を通して考えたこと・気付いたこと」について 800 字程度（自由記述形式）でレポートを作成させた。表 4 は、学生の記述内容の特徴を整理したものである。

表 4：野菜の栽培活動を通して学んだことに関する学生の記述

項目	数 (n = 69)	例
野菜の生長	20	・自分が想像していたよりもきゅうりの生長は早い ・野菜がすくすくと成長していく様子が見られることが楽しかった。
野菜作りの知識	12	・野菜を育てることは意外と大変 ・花から野菜の実がなるということを初めて気づいた。
つながり	14	・食べ物への感謝の気持ちが生まれる ・友達と協力しながら野菜の生長を見守ることが出来、嬉しかった。
自分の変化	13	・野菜を育てることの楽しさや面白さを感じた。 ・手が汚れることや虫に対する抵抗が少なくなった。
自然の大切さ	7	・自然の面白さや大切さを感じる。 ・自然に触れること、興味関心をもつことが大切
環境構成	3	・子どもたちが「野菜を育てることを楽しい」と思える環境づくりが必要

学生は、野菜を育てるという直接体験をすることで、「野菜の生長」(20)、「野菜作りの知識」(12)を体験から学んでいる。また、グループごとに同じ野菜を協力して栽培することで「つながり」(14)を感じて取り組んでいることも伺える。以下は、野菜の栽培活動を通して、人とのつながりを感じ、活動への意欲を高めた学生 A の感想である。

【学生 A の感想】 ※一部抜粋，下線は筆者が記入

私は、同じグループの人の行動に刺激を受けました。グループの人たちが水やりの際にみつけた枝豆の生長の記録を共有してくれて、自分も見に行ってみようと思い、一緒に育てることが楽しいと感じました。協力して草抜きを行ったり、栽培の工夫についてアイディアを出し合ったりすることでモチベーショ

シの維持や知識が深まることに繋がりました。

最後に、枝豆の生長をまとめ記録にすることでより学びが深まりました。肌で体験したことに加え、理論的に順序や注意点を振り返ることで新たな発見がありました。特に、育て方については、まだ収穫まで出来ていないので、採り方がとても参考になりました。

④模擬保育(第13～16回授業)__写真撮影, PPT+直接体験


第13～16回の授業は、対面で行った。「身近な素材や自然物を使った遊び」に関する保育実践をグループごとに構想し、発表した(表5)。発表当日は、グループごとに実施した模擬保育の様子を資料にまとめ発表する形式とし(図4)、一部、遊び方などについてはその場で実際にやってもらった(図5)。また、発表後、質疑応答の時間を設け、模擬保育について振り返りを行った。さらに、授業終了後、学生に「模擬保育実施記録」としてグループでの活動および発表当日の振り返りを含めレポートの提出を求めた。

表5：学生が考えた保育内容

	タイトル	内容	対象年齢
1	おとあてっこゲーム	様々な自然物を箱に入れ、どの自然物の音かを当てるゲーム	3歳児10月
2	はっぱベタベタかんむりづくり	園庭で見つけた自然物を使ってオリジナルの冠をつくる	3歳児10月
3	手作り短冊	植物でつくった色水で七夕で使用する短冊を染める	5歳児7月
4	どんぐりころころ	どんぐり転がしゲームをして遊ぶ	3歳児10月
5	松ぼっくりけん玉を作ろう	拾ってきた松ぼっくりを使ってけん玉づくり	3歳児9月
6	身近な自然で色水遊びをしよう！	身近にある草花を集め、ビニール袋に入れ揉んで色水をつくる	4歳児7月
7	見つけて作ろう！宝物入れ	身近になる草花を摘み、箱に貼って自分だけの宝箱をつくる。	3歳児10月

①子どもの姿

散歩のときに、石や葉っぱ、木の実の形や大きさに興味をもっている様子。



②ねらいと内容

ねらい

- ・自然物の形や大きさだけでなく、音にも興味を持つ。

内容

- ・自然物を箱に入れ、音の違いを楽しむ。
- ・様々な自然物のおとあてっこゲームを楽しむ。


③教材観

- ・箱の中に様々な自然物を入れて楽器のように鳴る音を楽しむ。
- ・秋の自然物を使うことで季節を感じることができる。

④指導上の留意点

- ・イメージがしやすいように子どもが日常生活で触れるものを使う。
- ・集中してきけるような声かけをする。
- ・四季を意識するために季節に合ったものを選ぶ。

⑤展開



遊びの様子




図4：学生が作成した発表スライド(グループ1)



図 5：当日の発表の様子（グループ 1）

「模擬保育について振り返り、考えたこと・気付いたこと・改善点などについて」1,200 字程度（自由記述形式）でレポートを作成させた。表 6 は、学生の記述の特徴を整理したものである。

表 6：模擬保育を通して学んだことに関する学生の記述

項目	数（n = 104）	例
計画の立案	32	・対象年齢に活動がふさわしいか考えること。 ・見通しをもった活動をしなければならない。
教材	23	・子どもたちの発達に応じた準備が必要だと感じた。 ・使用する素材についての特徴や知識を事前に身に付けておく必要があると感じた。
活動の多様さ	14	・同じものを使った活動でも、遊び方一つで楽しみ方が全く違うことを学びました。 ・他の班の模擬保育を見て、自分にはなかった発想が沢山ありとても興味を感じました。
振り返り方	7	・客観的にみることが、振り返り、改善をしていく上で大切だと思う。
環境構成	7	・自然物を用いるという事は衛生面や安全面への配慮がとても重要だと感じた。
教材研究の大切さ	7	・子どもたちと一緒に活動を行う前に保育者が実際によってみることが大切
援助	6	・一人ひとりを見て、一人ひとりに合った言葉かけをすることが保育者として大切であると強く感じました。
子ども理解	5	・子どもの発達や日頃の様子をしっかりと見ておく必要がある。
保育者の役割	3	・保育者が一緒に楽しむことが大切である。

学生は、模擬保育を通して「計画の立案」（32）、「教材」（23）について最も学びを感じていることが分かった。また、「活動の多様さ」（14）、「振り返り方」（7）の項目から、計画した保育実践を交流することで、他者の見方・考え方に触れ、視点の広がりを感じているのではないかと考えられた。

5. 考察

学生が ICT 器機に親しみ、保育実践への活用をイメージしながら学べる教材の工夫について、ICT 器機の活用の面から考察する。

今回取り上げた授業実践では、直接体験と ICT 器機の活用の両方を取り入れた演習活動を最も多く行った。また、課題の設定では、写真撮影、Web 検索、パワーポイントの作成を取り入れ、学生が全 16 回の授業の中で日常的に ICT

器機に触れられるようにした。学生は、課題に取り組む中で、ICT 器機を活用し、①調べる（情報を得る）、②記録する（情報を残す）、③資料を作成する（情報を整理する）、④相手に伝える（情報を共有する）、という作業を行っていたと考えられる。また、ICT 器機を活用することにより、間接的に体験したり、直接体験した学びを豊かに展開したりすることができると考えられる。例えば、夏野菜の栽培活動の事例〔4-2）-（2）-③〕のように実際に体験を行う活動では、野菜の生長を写真に記録することで、野菜の生長の様子が可視化でき、生長のスピードを学生は改めて捉えることができた。また、学生は、スマートフォンで撮影した野菜の写真をグループのメンバー同士で LINE アプリを活用するなどして情報を共有し、他者からの刺激を受けたり、興味・関心を高めたりする姿も見られた。このように、「写真を撮影し、生長記録を作る」という課題に対し、学生は、日ごろ親しんでいる ICT 器機であるスマートフォンを活用し、学生同士で情報を共有し学び合う活動となった。また、自然物を使った遊びの事例〔4-2）-（2）-①〕のように、Web 検索を活用して活動の見通しをもたせることで、学生一人ひとりがそれを基に身近な環境に目を向け、学ぶことも可能であった。その他、Web 検索を活用することで、映像資料以外にも様々な園の保育環境の写真や事例を見て学ぶ授業を展開することも可能であると分かった。このように、授業担当者が情報を提示するだけでなく、学生自らが Web 検索などを活用し、調べ、感じ、考える活動を創り出すことも可能であると考えられた。

以上より、学生が ICT 器機に親しむためには、ICT 器機を活用した様々な作業を課題に組み込むこと、その課題を行う中で学生自身が様々な ICT 器機を選択し、試すことが出来る課題の設定が大切であると考えられる。また、学生が課題作成を通して、ICT 器機の操作の仕方や資料作成の工夫をお互いに学び合える機会や仕組みを授業内に作ることも大切ではないかと考えられる。そして、最も大切なことは、ICT 器機はあくまでも学びを豊かにするツールであり、その基礎となる体験を学生が十分に味わい、体験から気付く・考えることではないかと考える。「子どもがどのように環境との関わりを深めていくのか」を実際の体験から学び、保育実践へのイメージを豊かにすることができる授業内容や教材の工夫を大切にしたい。

6. おわりに

本稿では、領域の専門知識と実践力を一体的に学ぶことができる授業内容の継続研究として、ICT 器機の活用に焦点を当て検討してきた。その中で、ICT 器機を取り入れることで、学生は体験や思考を可視化しやすくなり、人と共有しながら学びを深めていくことが分かった。特に、体験を記録することにより、

体験への意味づけが生まれ、他者との共有をスムーズにすると考えられた。しかし、今回の授業実践では、子どもが ICT 器機を活用する保育実践を構想するまでには至らなかった。また、学生が経験したことを記録するという作業においても、写真撮影が主であり、動画や音声などの他の方法も考えられた。そのため、学生が ICT 器機に親しみ、保育実践への活用をイメージしながら学べる教材について更に検討する必要があるだろう。これについては今後の課題としたい。

注

- 1) KJ 法は、文化人類学者の川喜田二郎が考案したデータをまとめる手法である。本研究では、様々な視点を持った記述である学生の感想をまとめるのに適した手法だと考え、採用した。
- 2) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会「教職課程コアカリキュラム」（平成 29 年 11 月 17 日）を参照した。
- 3) カラスノエンドウとは、ヤハズノエンドウ（マメ科の越年草）の別名。同属のイブキノエンドウを指すこともある。サヤエンドウのような豆果をつけ、これを笛にして遊ぶことが出来る。
- 4) NHK の E テレ「ミミクリーズ」は、「自然界の似たもの探し」をキーワードに 3～7 歳の子どもたちを対象とした、子どもの好奇心を触発し、観察眼と想像力を磨く番組である。授業では、子どもの気持ちを体験的に感じる活動を行うために、本番組を参考にして演習活動を行った。

引用文献

- 小林美沙子（2019）「領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討～領域及び保育内容の指導法に関する科目（人間関係）の授業実践から～」島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報，創刊号，p. p. 32-41
- 文部科学省（2018）「幼稚園教育要領解説」
- 吉永早苗（2017）3 章 Q-5 幼稚園教諭養成における ICT 活用とは，無藤隆代表保育教諭養成課程研究会「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～」萌文書林，p. 32

追記

本研究は、日本乳幼児教育・保育者養成学会/保育者養成課程研究会第 1 回研究大会（2020 年 12 月 6 日オンライン開催）において発表した内容に加筆・修正を加えたものである。